

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

外国人労働者から考える日本 (変わるネパールと変わらぬネパール： グローバル化した世界に暮らす, 第20回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5098



マガール人の民族衣装を着て歌う人気歌手（愛知県、2005年）。

変わるネパールと変わらぬネパール

——グローバル化した世界に暮らす——

第20回

先日、愛知県のA市で「ラカン記念の夕べ」という催しに出席した。これは、ネパールから来日し非正規で働いているマガール人が、民族の英雄ラカン・タバを記念して開いた文化プログラムだ。会場は市の文化センターの中ホール。240席はネパール人で埋まり、ライブ演奏と本国から招いた人気歌手の唄声に会場は熱気につつまれた。ロビーにたつと隣のセミナールームでは、日本で働く日系ブラジル人の子どもとお母さんたちが自国の子ども向けテレビ番組にあわせて歌い、踊っている。「愛・地球博」のお膝もと愛知県は、それがなくてもふだんから十分に万国博覧会の様相だ。思えばトヨタに代表される、東海地方の好景気はこうした外国人労働者が下請け、あるいは孫請けの工場で働いているおかげであろう。数百人はいるマガール人もその一端を担っている。

ところで最近、大阪市の現業職員の年収がさまざまな手当を合わせると1000万円を超えることが話題になっている。これを記事にし批判しているのは、たいていは自分の年収がそれに満たない（？）大手新聞社の「エリート」記者たちだ。そこには、大学を出て頭脳を使って仕事をする者の給料が、身体を使って働く者のそれより低い社会はおかしいじゃないか、というもっともらしい理屈と記者本人のねたみが透けて見える。

外国人労働者から考える日本

だが、この理屈は現実を反映しているのだろうか。日本は高校進学率96パーセント、大学進学率50パーセントという未曾有の高学歴社会を迎えている。若者の多くは自分の好きな仕事ややりたいことのためにはフリーターを辞さない。ましてや、多くの日本人が忌避する3K職（きつい・きたない・危険）にはなかなか就かない。その間隙を埋めているのが外国人労働者だ。

かといって正規、非正規の外国人労働者が制度的に就けない現業職種もある。先の例はまさにこれにあたる。だとすると、需要と供給により価格は決まるという市場原理に照らして、身体をはって働いている人の給料が、コンピューター画面に向かっている人のそれを上回るのは当然であろう。昔と異なり今日の日本人は、多数の知的生産者と少数の肉体労働者からなるのだ。こんな簡単なことがなかなか理解されないのは、身体よりも精神を高等なものとして疑わないエリートのエリートたる所以であり、そう考える人の方が多数派であることの証しである。外国人労働者とのつきあいは、さまざまな日本の矛盾を教えてくれる。

写真・文◎国立民族学博物館助教授 南 真木人

1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『〈都市的なもの〉の現在』（東大出版会 2004年）、「嗜好品の文化人類学」（講談社 2004年）、「エスノ・サイエンス」（京大出版会 2002年）など。